



## 第69回 本を読むことと、本を聴くこと

### ▼読書は清涼剤だけれど

もともと本を読むのが好きで、毎日、気に入った小説やエッセイなど必ず読む。これは義務でなく習慣のようなもので、移動中、昼休み、寝る前など、場所や時間は問わない。本の世界に飛びだけで、一種の気分転換となる。最近では、スマホで読める電子図書ができて、さらに便利になった。アプリを使えば、重い本を携帯しなくても、いつでも読める。ただ問題は、紙の本を読むより目が疲れやすいと感じる点だ。長い時間、じっとスマホ画面を見つめていると、かなり目が疲れてくる。さてどうしたものかと考えていたら、オーディオブック（聴く読書）というのがあるのではないか。これだ、と思い、さっそくアプリ登録してみた。

### ▼聴く読書

聴く読書というのは、要するに朗読のことである。配信する側も考えたもので、月当たり数百円を払えばメンバー登録ができて、「聴き放題本」が自由に視聴できる。とくに著作権の切れた昔の小説など、好きなだけ聴くことができる。出張へいく運転中に聴いているとなかなか楽しい。そこで気づいたのだが、運転中はけっこう騒音のなかにいるということ。トンネル内の騒音はひどくて、朗読がほとんど聞き取れないが、運転中のスマホ操作は危険なので、そのまま聞き流している。それでも何とかつじつまがあうところが面白い。そして、朗読の場合、話し手の技量が大きく影響する。本を目で読むときは、黙読しつつ頭の中で情景が作られ、非人称が脳内で語っているような印象がある。しかし、朗読の場合、読み手の声のトーンやリズムが、登場人物のイメージに強く影響する。読み手が下手くそだと、小説の雰囲気がち壊しである。そう考えると、本を聴くことは、本の書き手と読み手の間に「話し手」という介在が入った、3人で作り上げる一種のコミュニケーションなのかもしれない。

### ▼目でよむことと耳で聴くこと

もうひとつ、本を読むことと聴くことで、どうも違うなと感じる点は、セリフと擬音だろうか。風の又三郎の冒頭、「どっどど、どどどど、どどどど、どどど。青いくるみも吹きとばせ、すっぱいかりんも吹きとばせ」という下り、目で読むのと音で聴くのとはずいぶん違う。斎藤孝の「声に出して読みたい日本語」で、言葉というものは音やリズムなど、身体性を伴うものであり、音読する体験が大切と語っていた。本は目で読むことが多いけれど、聴く読書にも、言葉の身体性のリアルを体感できる面もあるのだと感心した。同じ本でも、黙読したほうがよい本、音読で聴いたほうがよい本があるのかもしれない。たぶん、哲学や思想は黙読、詩や物語には音読が向いているような気がする。いずれにせよ、よい物語は、どちらでもここに沁み入ってくることは間違いない。目が疲れている人は、いちど「聴く読書」を試してみられてはいかがだろうか。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにくち しんいち)